

アンティゴネーの「名」
—アントナン・アルトーにおける自我の問題—

荒井 潔

アンティゴネーの「名」 —アントナン・アルトーにおける自我の問題—

荒井 潔

序

1937年9月、ほぼ無一文でアイルランドを旅行していたアントナン・アルトー（1896-1948）は、ダブリンで異常な言動により騒動を引き起こして浮浪罪で投獄され、国外退去の処分を受ける。ル・アーヴルに強制送還されたときには激しい被害妄想と精神錯乱に取り憑かれており、自己の同一性さえ危うい状態であった。彼はその後六年もの間、四つの精神病院をたらい回しにされることになるのであるが、占領下の精神病院の状況悪化を憂慮した母親や友人が奔走した結果、1943年2月に南仏の非占領区域ロデーズの精神病院へと移送され、主治医ガストン・フェルディエールの治療——独自の「芸術療法」と電気ショックを主体とする——の下でようやく落ち着きを取り戻し始める。ル・アーヴルの病院に収容されてからロデーズの病院に移されるまでの間もアルトーの手は書くことを止めてはおらず、この間に200通を超える書簡が書き遺されているが¹⁾、ロデーズではついに〈創作活動〉が再開されることになるのである。

1943年9月、フェルディエール医師の勧めでルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』第六章の翻案を行ったのを契機に、アルトーは手紙以外のテキストを執筆するようになる。10月には「カバル・エニスーカタル・エスティ」というキリスト教神秘主義色の濃いテキストを書き上げ、同時期にはデッサンも描き始めている。とはいえ、この時期のアルトーの言動はなおも不安定で、とりわけダブリンでキリスト教への回心を表明して以来、彼のテキスト——まだ大部分は書簡であるが——には不可解な神学的議論が綴られるようになっていた。

この宗教的混乱の状態から徐々に抜け出し、安定した創作活動が行えるようになるのは1945年以降のことである。この年の1月、彼は彩色を施した大型のデッサンを描き始め、2月からは学童用ノートに自らの思考を継続的に書き綴ることになる。翌年5月にロデーズの病院を退院した後もノートは書き続けられ、死の直前に至るまで406冊が書き遺されている。45～47年までのテキストを集成した『手先と責苦』、47年2～3月に一気に書き上げた『ヴァン・ゴッホ 社会による自殺者』、同年11月にラジオ放送のために執筆した『神の裁きとけりをつけるために』といった晩年の主著は、このノートの草稿を基に制作されている。

このように、本格的な創作再開に至るまでにアルトーは約二年間の時間を要したのであるが、その間に書かれ、アルトーがロデーズの病院を退院した後もフェルディエール医師が——返却の求めにも応じず——保管していた草稿の一つに、「フランス人たちにおけるアンティゴネー」と題され、「ガストン・フェルディエールに」という献辞が付された短いテキストがある²⁾。タイトルと献辞が付されているので独立したテキストであることは間違いないが、署名はなく執筆の日付も書き込まれていないため、未完である可能性もある。だが内容は極めて首尾一貫しており、何度か推敲の跡が見られることから、一気に書き上げた習作のようなものではなく、いわゆる〈作品〉として書かれたものと思われる。このテキストそのものを単独で扱った研究は我々の知る限りまだ行われていないが³⁾、1977年にガリマール社刊『ロデーズの新著作』で初めて公開された際には、編集を担当したピエール・シャレが簡単な解題を付している⁴⁾。

シャレは当該のテキストには執筆時期を示す手がかりがなく、それに言及している書簡も見当たらないことを明記した上で、それが1945年3月9日のフェルディエール宛書簡に続く数日間に書かれたのではないかと推測している。その根拠として、時期によってかなり異なる彼の筆跡、筆致が同一であること、同じインクとペンで書かれていること、安定した筆致と文体が、精神的にも身体的にも充実した時期を示していることが挙げられている。また、この手紙には彼が「自我と無限に関するものになると思われる新しい本のかなりの頁を書

き上げ」ており、そこでは哲学者たちがこれらの問題について持っていた着想を「詩にすること、そして哀れな人間の心の奥底で体験されたひとつのドラマとして生き生きと上演することを試みた」⁵⁾と書かれているが、ここで粗描されている内容はまさに「フランス人たちにおけるアンティゴネー」が「詩的な形式」で語っていることだとして、この「本」との関係を示唆している⁶⁾。さらに、アルトーにおいては例外的なことであるが、このテキストには「フランスの大地」に闘って倒れた「英雄たち」をめぐる「愛国主義の表明」が認められることに言及し、1944年8月のパリ解放によってフランス人は皆、心のなかに勝利に満ちた愛国心を抱いたのであり、アルトーもまたその「時代の空気」を病院の壁越しに吸ったのだと主張している。

しかしながら、1979年に同じガリマール社から刊行された『全集』第九巻に収められた際、編集者のポール・テヴナンは、インクの色は1945年3月9日の書簡のものとは異なっていること、筆跡や筆致はむしろ1944年4月2日のフェルディエール宛書簡のほうに近いこと、彼の筆跡は1946年初頭までは大きく変化してはいないこと、フェルディエール医師の名前は1944年2月5日まで誤ってFerdièresと綴られていたが、ここではFerdièreと正しく綴られていること、1945年2月からテキストの執筆には主に学童用ノートが用いられていたが、これは二つ折のルーズリーフに書かれていることから、このテキストを1944年に執筆されたものと推定して編集し (IX, 244-245)、この編集方針は2004年にやはりガリマール社から出版された『アントナン・アルトー作品集』でもエヴリーヌ・グロスマンによって踏襲されている⁷⁾。

執筆時期を確定する際、インクの質や媒体の種類、筆跡や筆致など、物理的な手がかりが重要なことは言うまでもないが、シャレとテヴナンがそれぞれ物理的で客観的な根拠として挙げたものが一年もの開きのある異なる時期を指し示している以上、何らかの新資料が発見されない限り、このテキストの執筆時期を確定することは困難であろう。このように書誌的に不明な点が多々認められるテキストではあるが、内容はそれ以上に謎に満ち、主題と構成の両面で興味深いものがある。

まず直ちに見て取れることであるが、『全集』版もしくは『作品集』版でわずか三頁ほどの短いテキストであるにもかかわらず、際立って頻出しているいくつかの単語がある。「名」（7回）と「自我 [le moi]」（9回）の二語は主にテキストの前半に集中して現れており、「身体」（11回）と「フランス（人・的を含む）」（12回）の二語は主に後半に、さらにテキスト全体を通して「闘い [combat]」、「戦争 [guerre]」、「勝利」、「敵」、「兵士」など戦闘にまつわる語群（16回）が数多く認められる。テキストの構成から見ても、前半と後半では明白な違いが認められる。「戦闘」はテキスト全体を貫くテーマになっているのであるが、前半ではアルトー自身が初期の頃から絶えず問題にしてきた、「自我」をめぐる「内なる闘い」が描かれているのに対し、後半では「フランスの大地」の上での「見知らぬ（＝異質な、外部の、外国の [étranger]）敵」との身体的な戦闘が語られており、第二次世界対戦への直接的な言及はないものの、「戦火に向かう兵士たち」など、それを暗示する表現も認められる。とくに後半に用いられている愛国的な口調は、ピエール・シャレも指摘していたようにアルトーのテキストのなかでは——大戦中に書かれたか否かに関わらず——例外的なものである⁸⁾。「自我」、「名」、そしてとりわけ「身体」はアルトーの全生涯を通じて主題を構成する重要な要素だが、ここではこれらの要素が「アンティゴネー」というひとつの固有名を核として複雑に絡み合っているのである。以下、このテキストの主題と構成について詳しく見ていきたい。

魂の名

「フランス人たちにおけるアンティゴネー」というテキストは次のように書き始められている。

紀元前四百年のギリシアで刑場に向かった実在のアンティゴネーの名は魂の名 [un nom d'âme] だ。それは私のうちではもはや悔恨として、また歌として発せられるのみだ。私自身もまた、私の兄である自我を埋葬する権利

をもつが故に刑場へと向かった。その自我を私は神から授かったが、私はそれをどうしても思い通りにはできなかった。私自身以外の全ての自我が、生まれた時からよくわからない異様な寄生虫として私自身の自我のなかに忍び込み、私がそうしようとするのを邪魔していたからだ。(IX, 124)

ギリシア神話およびソポクレスの悲劇におけるアンティゴネーは、オイディプスの娘である。彼女はテーバイを攻めた反逆者として野晒しにされていた兄ポリュネイカースの屍を、統治者である叔父クレオンが発した禁令を犯して埋葬する。息子ハイモーンの許嫁であるにもかかわらずクレオンはアンティゴネーを捕らえ、地下の岩屋に生きながら埋葬してしまう。その後クレオンは処分を撤回するのだが、アンティゴネーはすでに首を吊って死んでおり、ハイモーンも彼女を追って自刃する。

しかしながら、「紀元前四百年のギリシアで刑場に向かった実在のアンティゴネーの名は魂の名だ」という記述があるように、このテキストで問題になっているのはアンティゴネーというひとりの人物それ自身ではなく、その「名」である。そもそも「実在のアンティゴネー [l'Antigone réelle]」とわざわざ形容詞が付けられているように、ここではギリシア神話の登場人物が問題になっているのではなく、アンティゴネーという「名」を持つにふさわしい、実在するひとつの「魂」のことが語られているのだと考えなければならない。

1937年からアルトーは固有名の問題に取り憑かれていた。同年5月から8月にかけて、アルトーはしばしば自己に固有な名前の消滅、署名の拒否、匿名性の肯定について語っていたが、アイルランドから帰国した後、精神病院に入院中に書かれたアルトーの手紙やノートには、逆に夥しい固有名が過剰なまでに繰り返し記載されることになる⁹⁾。このように固有名の消失と氾濫に脅かされていたアルトーのエクリチュールは、深いところでは「自我」という問題の考察と絶えず関わっていたのであるが、「フランス人たちにおけるアンティゴネー」というテキストでは「名」と「自我」の問題が明示的に重なり合っていて、彼の「自我」の問題がなぜ執拗に「名」というテーマの形を借りてテキストの表

面に現れ出ていたのかを理解する鍵を提示しているように思われる。「アンティゴネーという名は秘密であり神秘である」(IX, 124)と書かれているように、このテキストを読む者には、神話的背景を超えたところでアンティゴネーというこの名の秘密と神秘を探究することが求められているのである。

まず、「名」というもの一般について、このテキストでアルトーは次のように述べている。「名というものは偶然や無からくるのではない。美しい名はどれも、私たちの魂が、時間の直接的で可感的な絶対のなかで自分と引き換えに勝ち取ったひとつの勝利である」(IX, 124)。つまり、ある名前が付与されることには必然性があり、名は一箇の死すべき者に代わってその本質を絶対のなかで永遠に存続させていくものである、とアルトーは考えているのであって、後のテキスト、例えば1946年4月のノートには次のような記述が認められる。

私の自我はアントナン・アルトーというこの名であり、この自我は何も信じず、常に変化し、常に同一で、時間の今この瞬間におけるように、私自身として常にそこにいる。[...] つまり私が動かない、動けない、決して動くことのない一点がある。それは私が常に、今ここにあるのと同じ人格とともにアントナン・アルトーと名のつてきた、そしてこれからもそう名のるだろうということであり、ずっと以前からそうなのである。(XXI, 64)

つまり、固有名こそが自らの「自我」に他ならないのであり、固有名が自己同一性を外から保証しているのではなく、逆に危機に陥る度に自己同一性のほうが自分の固有名へと回帰してくるのである。アルトーはこの一節でそのように主張しているのであるが、「名」一般の問題についてはひとまずこの程度にとどめ、次にアンティゴネーという固有名そのものについて考察を試みてみたい。

以前からアルトーには固有名に対するフェティシズムともいうべきものがあり、小説『ヘリオガバルス あるいは戴冠せるアナーキスト』(1934年)でローマ皇帝ヘリオガバルスの名を分解しつつ詳細な分析を施している。また1939

年以降、とりわけ1945年のノートに顕著に認められるように、《 Ar-TAU 》、《 TAU RA RA TAU 》、《 AN-TRHO-PAU 》など彼が自分の名を解体してテキスト上に署名の破片をまき散らしたこと、あるいは《 À tantôt 》、《 tarte à crème 》、《 tartine 》など、アナグラムによってそれらを再構成したことを想起するならば、Antigone というこの名にはまず彼自身の固有名Antoninの一部を読み取ることができるであろう。さらにギリシアとの関係について言えば、1937年10月にソットヴィル＝レ＝ルーアンの精神病院に収容された際から38年12月頃まで、アルトールはAntoneo Arlanapulos（フランス名Antoneo Arland）というギリシア人の名で署名し、その後1941年12月から43年9月まではレヴァント系ギリシア人である母方の姓を用いてAntonin Nalpasと名のついていた¹⁰⁾。このことは彼のギリシア名への執着を示すと同時に、〈起源〉（母胎）への回帰願望をも表している点で興味深い。なお、エヴリーヌ・グロスマンは『作品集』の註において、このテキストのキーワードである「闘い」を意味するギリシア語の「アゴーン [αγών]」には、アンティゴネー [Ἀντιγόνη] との言葉遊びがあると指摘している¹¹⁾。

ちなみにこのテキストにアンティゴネーとともに登場する固有名はジャンヌ・ダルクと聖王ルイ（ルイ9世）のみであり、ジャンヌ・ダルクについては「見知らぬ身体に同意するよりも火刑に向かい埋められることを望んだ」（IX, 126）ことによって、聖王ルイについては「敵に屈するよりペストで死ぬことを選んだ」（IX, 125）ことによって、その自己犠牲をもってフランス的なものを守り抜いた英雄として名を挙げられている。「ペスト」は「演劇とペスト」（1934年）という論文に詳述されていたように、アルトールが「生」と「演劇」を表現する際に鍵となる要素である。ジャンヌ・ダルクについては、カール・ドライヤー監督の映画『裁かるるジャンヌ』（1928年公開）でアルトールは修道士ジャン・マシュエを演じていた。このことからすれば、アンティゴネーもまたアルトールの伝記的事実と何らかの関わりがあると推察される。

実際、1921年、アルトールはシャルル・デュランが立ち上げたばかりの「アトリエ座」に加わり、翌年12月にジャン・コクトーの戯曲『アンティゴネー』

において予言者ティレシアースを演じている¹²⁾。そしてその時アンティゴネーを演じたのは、「アトリエ座」で出会ってすぐに彼が熱烈に愛したジェニカ・アタナジウであった。彼と生活をともにした唯一の女性であるジェニカとの関係は7年ほどで破局に至るが、その後もアルトーは数通の手紙を送っている。1940年10月30日にヴィル＝エヴラルの精神病院からジェニカに宛てて送られた手紙には、「親愛なるジェニカ、僕がここに収容されてから一度も手紙を書かなかったけれども、僕の解放 [délivrance] のためにあなたが起こしたあらゆる闘い [batailles] のなかで、僕は何度もあなたの姿を見ていたし、そこであなたは僕と一緒に苦しんでくれた」¹³⁾と書かれている。たとえそれがアルトーの幻想にすぎないとしても、この時アルトーの眼前に浮かび上がっていたのは、孤独のなかに打ち捨てられた彼の魂を解き放つために「闘い」へと赴くアンティゴネー＝ジェニカの魂であったことは想像に難くない。

とはいえ、上記の考察はいずれも推測にとどまるものであり、このテキストで中心化されるものが「アンティゴネー」という名でなければならなかった確固たる必然性にはまだ辿り着いていない。ただ、このテキストにおいて「魂の名」、「勝利の名」が少なくとも女性の固有名、とりわけ兄弟姉妹といった近親者の固有名であることにアルトー自身が強いこだわりを示していることは間違いない。

筆舌に尽くせないこの勝利の名が、女性や姉妹という個人的な形を纏って受肉して私のもとに戻ってくるには、私は彼女のように、彼女は私のようにそれに値しなければならなかった。

兄や姉であるためにはこの内なる最高位の闘いをしなければならなかったのであり、その闘いからよくわからない忌まわしい無限の諸力に対する近親、近縁の勝利のようにして個人の自我が出てきたのである。(IX, 124-125)

確かに、ロデーズの病院で書かれたノートには、すでに死去した妹と祖母をはじめとして、彼に深く関わりのある何人もの女性の名が繰り返し書き付けら

れている。そして、「妹」であるアンティゴネーから出発したこのイメージは、1945年4月には、「私を絶対的に愛するこの生きた女兒という理想的なイメージ」(XV, 262) へ、そして同年6月には「私の娘」へと変容していくのである。

私は虚無のなかにいて、新たな創造のためにひとりの娘を誕生させた。この娘、この子供は私を理解し、私を助けた。というのも、彼女はこの虚無のなかで私が見出し、私を全面的に愛した最初の意識なのだから。(XVI, 158)

しかも、この一節の少し前には、「そして私もまた死んでおり、二人の哀れな娘たちと同様に死者である。死ぬ前の盲いた父を助けるように、彼女たちは私を助けてくれるのだ」(XVI, 156) と書かれていて、アルトーがここでアンティゴネー（とイスメーネー）の父オイディプースを暗示していることは明白である。つまりこの時アルトー自身の立ち位置は、〈兄を助けるアンティゴネー〉から〈娘に助けられるオイディプース〉へと移行しているのである。

同じノートに「私の娘たちは私が愛した私の意識全てである」(XVI, 184) とも書かれているように、後に「心の娘たち [filles de cœur]」と呼ばれるこの想像上の娘たちは、自己の内部で語る様々な声のなかからアルトー自身が主体的に選別し、誕生させた「意識」である。彼はその一つ一つに彼に関わりがあった女性の固有名を与え、それらを「私の娘たち」と呼んでいるのである。同時期のノートには「わが家族こそ恥ずべきものであり、それは私の解放を妨げている」(XVI, 186) という記述もあることから、アルトーは事実上の家族を拒絶する一方で、自分自身の手によって新たな神話的家族を再編成することを企図していたことが理解できる。

自分の「娘たち」というこの新しいテーマは、この後のテキストに頻繁に登場することになるのであり、例えば1946年3月のノートに基づいて書かれた『手先と責苦』所収の断片には、「生まれてくる私の6人の心の娘たち」(XIV*, 13) として、父方母方の祖母、元婚約者、庇護者、友人など、アルトーの伝

記的事実に直接関わった女性たち6人の名が挙げられているが、このテキストにおけるアンティゴネーはおそらくその原型となっているのであり、その意味でもアンティゴネーこそ最初の「魂の名」であると言えるであろう。

勝利の名

では、アンティゴネーという名が「魂の名」であるということは如何なる意味をもち、如何なる問題を提起しているのであろうか。このテキストでアンティゴネーが言及されている理由は、ある強大な力に逆らい、自分の命を賭して兄を埋葬したという彼女の行為に集約される。アルトーはこのテキストで自らをこのアンティゴネーに重ね合わせているのだが、それは彼自身もまた、「神から授かった自我である私の兄を埋葬する権利をもつが故に刑場へと向かう」からであるという。ここで「兄 [frère]」¹⁴⁾と言われているのは彼自身の「自我」であり、その「兄＝自我」を彼は「自分の思うようにできなかった」、なぜならば「生まれたときから、私自身とは別のあらゆる自我どもが、よくわからない異様な寄生虫として、私固有の自我のうちに忍び込み、それを阻止しためだ」とアルトーは説明している。自分の「自我」が自分の「兄」であり、それを自ら埋葬するという奇妙な行為、そしてまた、自分の「自我」のなかに複数の別の自我が寄生しているという異常な状態について、アルトーはここではそれ以上何の説明も加えてはいないが、これまでの経緯から理解し得ることについて簡単に触れておきたい。

アイルランドからの強制退去の船上で拘束衣を着せられ、帰国後直ちに精神病院へと収容されたアルトーの精神状態は極めて不安定で、自己の同一性は危機的な状態にあった。だが、アルトーの自己同一性の危機、すなわち自分自身の自我、思考、存在、精神、魂といった同一性の根拠となるものが欠落しているという感覚、それと同時に自分の内部に他なるもの、「分身」が存在するという感覚、あるいはまた「無意識」の「さまざまな衝動」が自分に命令しているという感覚は、1923～24年に書かれた彼の文学的な出発点である『ジャッ

ク・リヴィエールとの往復書簡』においても強く訴えられていた。1937年9月頃から少なくとも1945年4月頃までキリスト教への信仰を表明していたのも、神という絶対精神に拠り所を求めることによってこの自己同一性の問題を解決しようと考えた結果である。このテキストが書かれたロデーズの精神病院においても、1943年7月のフレデリック・ドゥラングラード宛書簡で、自己の身体に雑多で不純な意識の集合体が棲み着いているという感覚があることを次のように訴えていた。

我々がいる身体は仮の産物にすぎず、そこでは我々は、我々以前に皆の意識が生きているのを感じる。そして我々はそこで交差点のように皆によって住まわれており、そこでは皆の不純な意識が、連れ込み宿にでもいるみたいにくっついていてる。

私は私の身体のうちで、ジャン、ピエール、ポールが話し、どれもこれも地上での生を永遠に猥褻なものとしてしまうのに最適な方法で密談をしているのを聞いている。(X, 51-52)

「フランス人たちにおけるアンティゴネー」の執筆時点でアルトーが依然としてキリスト教への信仰のうちにいたことは「神から授かった [Dieu m'avait donné] 自我」という表現が示している通りだが¹⁵⁾、この信仰も安定したものではなく、絶えず疑念による揺らぎを伴っていた。このテキストにおいても、神から授かったとはいえ、その自我を死者として「埋葬」するということは、神という絶対精神に由来する「自我」の先天性、同一性、単一性、不変性、永遠性、さらには神の絶対性そのものが彼の内奥で崩れつつあることを意味していると言えるであろう。

この自我の「埋葬」、それはアルトーによれば彼の「最後の闘い」でもある。そして、この自己の「内なる最高位の闘い」は、「私たちの魂の無意識」である「何かよくわからない忌まわしい無限 [je ne sais quel abominable infini] が行使する諸力」、「私たちの内にあって存在でも自我でもないのに私たちの自

私の存在のように思わせようとしているものの一切の、鈍く逃げ腰な諸力」(IX, 125) との闘いであるとされている。先天的な自我はその内部に侵入した無限の他者である偽の「自我ども」に脅かされている。それは無意識における無限の力に突き動かされ、自分のものではない「存在」や「身体」と同一化するように駆り立てられて、「自分は生が私を埋葬してしまった身体にすぎないのだと信じ込む究極の錯覚」(IX, 125) のうちに陥るのである。

シャレがこのテキストと同時期のものと主張している 1945 年 3 月 9 日のフェルディエール医師への手紙においても、アルトールは「自我と非自我との永遠の闘い [l'éternelle bataille entre le moi et le non moi]」に触れつつ、「知らず知らずにさまざまなもの [choses]、自分ではないのに自分のなかで自分のふりをしようとするあらゆるものがあふれんばかりに侵入してくるのに絶えず魅せられてしまい、おのれ自身、おのれ自身へと決して立ち返ろうとはしないという、このあきれた自我の問題」¹⁶⁾ に注意を喚起している。「フランス人たちにおけるアンティゴネー」ではさらにそこから一步踏み込んで、「自分の魂を実存へと駆り立てる力を、まずその魂から切り離し、その魂が生きている、そしてその魂を生きている存在とは違うものとして自分を認識するという逆方向の力を見つけること」(IX, 125)、つまり「存在」へと駆り立てる力から自己の魂を解き放つと同時に、魂が今生きている「存在」から自己を分離するもうひとつの力に従うことの必要性を説いている。この「逆方向の力」をアルトールは「そこに自分の姿を見ていた存在に抗って、存在のアンティゴネー的な力 [la force Antigone de l'être] が自分の存在から切り離すことができた憐れみの手」(IX, 125) と呼び、そこに自己の救済を託しているのである。

しかしながら、この「逆方向の力」は魂を「存在」へとではなく「死」へと駆り立てる。「錯覚」から抜け出すために「無限の諸力」と闘って偽りの「存在」や「身体」から離脱することは「死」を意味するからである。だがこのとき「自分の自我の他者として、すなわち死者として自分自身を埋葬する」(IX, 125) ことによって、あらためて「個人の自我 [le moi personnel]」を獲得し、「存在の英雄的な自我 [le moi héroïque de l'être]」として再生する、あるいはむ

しろ死後の生を生きることができる¹⁷⁾。そして「生を取り戻すために、自分たちの死を再び生きること」を可能にする「〈永遠〉のアンティゴネー」(IX, 126)が戻ってくるのであり、それこそが「私たちの魂が自分と引き換えに得たひとつの勝利」(IX, 124)なのである。それ故アンティゴネーは「魂の名」であると同時に「存在の英雄的な自我が勝ち取ったこの凄まじい勝利の名」(IX, 125)であるとアルトーは言うのである。非-自我どもと闘って「戦死」した〈兄=自我〉を近親者として悼み、死者として埋葬する行為そのものが、その埋葬を妨害し、現在の「存在」へとつなぎ止めようとする無意識の力との「闘い」に他ならず、そこで「死」を受け入れながらも勝利する自我こそが「英雄的な自我」の位置を占めることになる。そのことをアンティゴネーという「名」はすでにそのみで具現化、形象化しているのであり、このテキストにこの名が召喚された必然性もそこにあると言えるであろう。

本来の自己に立ち返るためには現在の「存在」と「身体」を放棄して「死」を経由することが絶対的に必要であるというこの確信は1937年以降のテキストに顕著に認められ、先に触れた固有名の消失もしくは署名の拒否とも密接に結びついていた。例えば1937年6月にジャン・ポーランに宛てた手紙にはこう書かれている。「私の名前を思い起こさせるものをすっかり抹消すること、それがあなたにお願いする最後の要求です。[……] 間もなく私は死んでしまっているでしょう。あるいはいずれにせよ名前が不要な状況にいるでしょう」(VII, 180-181)。同時期に書かれた『存在の新しき啓示』では、「私は実在しようとして、諸形態(あらゆる形態)に同意しようとして闘ったが、この世に存在するという常軌を逸した錯覚がそれらの形態で現実を覆ってしまったのだ」(VII, 120)として「形態[forme]」への憎悪を表明し、この書物を「啓示を受けた者」の名で刊行している。さらに8月には「タラウマラの国への旅について」を『新フランス評論』誌に「星印三つ」の署名で発表し、9月にはアンドレ・ブルトンに宛てて次のように書いている。

[……] 私はついにすべてを放棄しました。〈実在〉の観念そのものまで。そ

して私が神のなんたるかを再発見したのは、〈非実在〉を探究することによってでした。私が神について語るのは、生きるためではなく、死ぬためです。[…]
イエス・キリストが身体を経由しようとしたのは、身体を破壊することを、そして身体への執着をはねつけることを我々に教えるためでした。(VII, 221-223)

同じ1937年9月、アンヌ・マンソンに「神それ自身の〈名〉において公に語るだろう」(VII, 218)と書いているように、この時期のアルトーにとって「死」は〈非実在〉、すなわち〈神〉との同一化による個体の死を意味していた。固有名が消滅するのもそのためであり、イエス・キリストについて言及されていたのもその点においてである¹⁸⁾。それに対して「フランス人たちにおけるアンティゴネー」では——テキストにアルトー自身の署名がないとはいえ——「死」は「個人の自我」を獲得し、本来の自己へと立ち返るための「最後の闘い」であり、最終的に辿り着くべき局面は〈絶対〉ではなく〈個〉である。しかもその「勝利」にはアンティゴネーという——イエス・キリストではなく、それに先立つ「紀元前四百年」の——固有名が与えられている。こうした点から見ても、このテキストにはやはり神の絶対性の揺らぎと脱キリスト教の兆しを認めることができるであろう。いずれにせよ、ここで重要なのは個体の〈死〉それ自体ではなく、むしろその死体を埋葬する行為とともに始まるその〈死後の生〉であり、すなわち個体の「勝利」なのである。このことは「自我」をめぐるアルトーの意識がアイルランド旅行以前と比べて大きく変化していることを示す重要な証左である。

戦火の大地へ

これまで見てきたところでは、アンティゴネーは「無限の力」に対する反抗を体現しているとはいえ、ギリシア神話でのクレオーンとの対立に見られるような〈共同体の掟の侵犯者〉という相貌は呈していない。また、ヘーゲルが『精

神現象学』において注目したような、クレオーンが従う「人間の掟」（国家共同体）とアンティゴネーが従う「神々の掟」（家族）との対立もここでは問題となっていない。それどころか、この後アルトーはいささか唐突に「この憐憫の力はフランス的なものだ」（IX, 125）と断定する。そしてこれ以降、テキストの後半では祖国フランスを礼賛する愛国主義的口調で語ることになるのである¹⁹⁾。この憐憫の力はまた、「我々自身に対して率直 [francs : フランク人が語源] であるよう保ち、決して我々自身に嘘をつかないように促す、内なる誠実の力」と極めて倫理的な言葉で表現されるのであるが、文の主語がそれまでの「私 [je]」から「我々 [nous]」へと拡大されていることにも注意しなければならない。

こうした後半での変化は、さらにテキストの本質な構成要素にまで及んでいる。前半で自我の敵として登場していた、個人の内面において自己に寄生している無数の非-自我どもは、後半では「たぐさんの見知らぬ（＝異質な、無縁の）身体」に取って替わられるのであり、また前半で勝利者として登場する「英雄的な自我」は、後半では「永遠の自我」である「フランス的なもの [le français]」に取って替わられる。そして、「私たちを見知らぬ（＝外国の、外部の）敵のように包囲しているこの身体からある日自らを分離しなかったなら、誰もフランス人ではあり得ず、フランスに生まれることはできなかった」（IX, 126）という一節が示しているように、自我と非自我との間の内的な闘争であったものは、「フランスの大地」、「英雄たちの大地」へとその舞台を移し、動的な展開を見せることになる。そこでは「夥しい数の人間が集団で自分の観念のために死んだ」（IX, 126）ののだが、英雄であるそれらフランス人たちが死んだのは「自分の身体を失ってもうひとつの身体を得る」ため、「自分の身体を乗り越える」ためであるとされている。

テキストの後半で突如として焦点を当てられたこの「身体」という言葉は、一方では「この世で最大の敵は死の瞬間の私たちの身体だ」（IX, 126）と述べられているように、ひとりの人間を物理的な存在へとつなぎ止めている個人的な身体を指しているが、他方ではフランスの「敵」として外部からその領土

を侵害し、「私たち」を取り囲む兵士たちの身体をも指している。その上でここでは「永遠の憐れみのアンティゴネーが埋葬し、甦らせるために近づくことができるようなもう一つの身体」、すなわち「人間のフランス人的自我 [le moi Français de l'homme]」にふさわしい「生きているフランス人たちの身体 [des corps de Français vivants]」が希求されているのである。アルトーによれば、フランスが「英雄たちの大地」と呼ばれてきたのは、自分たちの魂を喰らう「見知らぬ身体」に同意するよりは「火刑に処せられ埋葬されることを望んだ者たち」の大地だったからである。そして、「彼らが倒れたこの大地から、永遠の光のアンティゴネーが再び降りてきて、彼らを再び立ち上がらせるであろう」(IX, 126) という〈再生〉の希望に満ちた力強い〈予言〉の言葉で、タイトルが示唆していたこのフランス版『アンティゴネー』、すなわちギリシア神話の登場人物の「名」を借りた〈フランスの神話〉はドラマティックに締めくくられている。

テキスト末尾のこのアンティゴネー像は、冒頭のそれとは明らかに異なっている。冒頭でのアンティゴネーは、ただ独り「刑場」へと歩いていく暗く静的なイメージで描かれ、それに対するアルトーの言葉も「それは私のうちではもはや悔恨として、また歌として発せられるのみだ」といった沈鬱なものであった。このアンティゴネー像は、1945年9～10月頃に書かれ、フェルディエール医師がこのテキストとともに草稿を保管していた「シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉」の草稿における「兜屋小町」の像に直結しているように思われる。

「兜屋小町 [la belle Heaulmière]」とは、フランソワ・ヴィヨンの『遺言詩集』(1461)のなかの詩「兜屋小町長恨歌」に登場する、絶世の美女であった自らの若き日々を惜しんで恨み節を詠っている老婆のことである。アンティゴネーとは似ても似つかない形姿ではあるが、アルトーはそこに「自分のうちで自分を悼み […] 死んだ魂の姿勢でうずくまって自分を嘆き悲しんでいる」「魂」の姿を投影している。それ故アルトーはこのヴィヨンの詩を「内的闘争の詩」と呼び、「兜屋小町を悼んで」「断腸の涙を流す」のであるが、しかしまた、そ

のようにして魂は「死のなかを歩き始めようとしているかのよう」であり、「それまでは老婆の卑しめられた身体のように不快で縮こまっているが、選ばれたものに乗移り、その目の前で変貌を遂げるのだ」(XVIII, 106) とも書いている。

これらの記述からすれば、アンティゴネーと兜屋小町はいずれも同じ状況にある魂の姿を捉えた「魂の名」であると言える。そして実際、テキストの冒頭で「うずくまって自分を嘆き悲しんで」いたアンティゴネーは、内的闘争において選ばれた自我を勝ち取った末、最後の場面では「永遠の光のアンティゴネー [l'Antigone de l'éternelle lumière]」(IX, 126) という、ニーケー（ウィクトリア）、ジャンヌ・ダルク、自由の女神といった民衆を導く英雄的な〈勝利の女神〉や、人々を救済するためにまばゆい光とともに降臨する〈聖母マリア〉など、重層的なイメージをまとった動的な形姿へと「変貌を遂げ」ているのである。

テキストの前半と後半に認められるこうした諸々の相違を、ここでテキスト全体の構成という観点から捉え直してみるならば、前半と後半とはちょうど折り重なるかのように同じ構造をもちながらも、異なる次元、異なる階層で展開されていることがわかる。テキストの前半部では、自己に寄生する無数の「自我ども」との闘いにおいて、「個人の自我」が——英雄的な死を遂げた後に——勝利する〈内部〉が描かれている。後半部では、フランスの大地を侵略する無数の「見知らぬ身体」との闘いにおいて、「フランス的なもの」が——やはり英雄的な死を遂げた後に——勝利する〈外部〉が描かれている。両者は、いわばアンティゴネーの「名」を中心として同心円状に重なり合っているのであり、このような二層構造において同じ〈死と再生の神話〉が反復されているのである。こうした内と外の重なり合い、あるいは内から外への拡大は、20～30年代のアルトーが自らの「症状」を語っていたときの表現を我々に想起させる。

1923年6月、アルトーはリヴィエールに自分は「精神の恐るべき病」(I*, 24) に苦しんでいると訴えていたが、同年7月のジェニカ宛の手紙には、彼が

また脚、胸、頭、顔面の麻痺感覚、および四肢や諸器官が切り離されてしまったような感覚をもっていたことが打ち明けられている²⁰⁾。1932年に鍼医ジョルジュ・スーリエ・ド・モランに宛てて書かれた一連の手紙でも、「精神が自らの所有権剥奪を身体的に感じている」(I**, 168)と書き、「知的空虚」が引き起こしている身体的症状を具体的に語っていた。このように、初期の頃より常にアルトーは身体面、もしくは外面に認められる問題の根底には必ず精神面、もしくは内面の問題が潜んでいると考えていたのである。このことはペストという疫病についても同様で、「演劇とペスト」においてアルトーは、ペストは「一種の精神的な実体」が外面化したものであり、「ある知的な力の直接的な道具ないし物質化」(IV, 18)であると主張していた²¹⁾。

こうした一連の経緯からすれば、占領下の精神病院のなかで体験した〈戦争〉の奥底にも、アルトーは各個人が抱える「精神の病」、ひとりひとりの人間が「決しておのれ自身へと立ち返ろうとしないという、あきれた自我の問題」の存在を認めたに違いない。監禁され、外部との連絡がほぼ遮断されていたこの時期のアルトーにおいて、時事・社会的問題についての記述や外界の事象に関する直接的な言及は数少ない。だが、テヴナンがこのテキストと同時期に書かれたものであると主張する1944年4月2日の手紙——そこにはフェルディエール医師が自分のことを理解しないことに対する抗議と、自分が錯乱した行動を取るという彼の非難に対しての弁明とが綴られているのだが——は次のような一節で終わっている。

全世界で名もなき惨事が起こり、人間たちが自らの意識の根底へと降りていく勇気を持たないが故に、わけもわからずに争いあっている時代に、自らの意識の葛藤を明るみに出し、他の人々に、彼らの内部の敵たち全てを破壊すべく区別することを教えること以外何も考えていないような精神〔アルトー自身のこと〕を意気消沈させている場合ではありません。祖国間の敵意は、各人が自分のなかで自分自身に対して抱いているあの敵意の作用なのです。しかしながら、これまで生きている人は誰も、この問題を解決するために必

要な犠牲を払おうとはしませんでしたし、この解決が得られなければ、決して平和は訪れません。私の唯一の目的は、真の平和を獲得するために必要な犠牲を払うことを受け入れるよう、我が友である人間たちを励ますことなのです。²²⁾

「祖国」、「犠牲」、「平和」といった言葉は、「フランス人たちにおけるアンティゴネー」を取り巻く戦時下の状況への暗示と呼応するものであり、この書簡に述べられた、意識の根底での自我の葛藤が国家間の戦争の根源にあるという考えが、先に見たテキストの二層構造の基盤にあることは間違いないであろう。アルトーは1945年2月16日、ジャン・ポーラン宛の手紙でも次のように危機感を露わにしていた。

私は八年間、闇の奥深くに潜り込み、〈宗教〉についての私の考えは、自我や魂についての私の考えと並行して進んできました。そして人々がもはや自分の魂を知らず、自我というものが何であるかもわかっていないことを知っています。しかし、人間に固有の個人的自我が今ほど攻撃され、ゆがめられ、粉飾されたことはないのです (XI, 44)

さらにアルトーは同年9～10月頃に執筆した「シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉」の草稿のなかで、第一次世界大戦末期の1918年に起こった「自分の自我の破綻」を振り返りつつ、「戦争の大惨事 [カタストロフ] は、私のうちでは存在の内的破局 [カタストロフ] に対応していた」(XVIII, 108)とも記しており、彼自身の個人的体験という限られた次元においてはああるが、「自我の問題」と「戦争」との間に相関関係があることを認めている。

後にアルトーは〈国家〉や〈社会〉に対して完全に敵対する立場を取ることであり、例えば1946年5月にはピエール・ブスケに宛てて「人々が平和に生きるために取り払われなければならないのは枠組みそのもの、つまり社会なのです」(XI, 273)と書いている。だがここで検証した一連の経緯が示している

ように、アルトーの危機感をはじめから〈国家〉や〈社会〉に反して個人の自由を守ろうとする姿勢に由来していたのではない。むしろ彼は「意識の根底」にある「自我の問題」の本質を明らかにすることにより、それが〈国家〉や〈社会〉を根本から揺るがす危険性を孕んだ問題であることを警告していたのであって、このことは記憶にとどめておく必要がある。『ヴァン・ゴッホ』以降のテキストでは、しかしながら、〈個人の意識の奥底〉→〈社会〉というこの方向性は完全に逆転する。すなわち、まず「社会の一般的意識 [conscience générale de la société]」(XIII, 20) というものが実体的に存在し、「戦争や革命や社会変動がまだ萌芽状態にあるとき、一体になった意識は問い掛けられ、自分に問い掛け、その判断を下す」(XIII, 17) のであり、この「集団の意識 [conscience de la masse]」こそが個人の意識の奥底で個人の自我を絞め殺しているのだと述べられているのである。最晩年のアルトーは、こうした「呪い」あるいは「魔術」が密かに、だが日常的に行われているという〈事実〉を暴き出そうとしたのであるが²³⁾、これについては稿を改めて論じなければならない。

結語

以上に見てきたように、アンティゴネーという〈名〉は、これまでアルトーが抱えてきた「自我と非自我」との「内的な闘い」という問題をひとりの女性のイメージへと具現化、形象化すると同時に、それを〈身体〉、〈国家〉、〈社会〉といったより拡大された次元へと開くための〈扉〉の役割を果たしている。

この同一テーマの拡大・発展がこのテキストの二層構造を成立させているのであるが、それはまた、以後のアルトーの思索の歩みそのものを示すことにもなる。彼がそれまで抱え続けてきた内的で根本的な「自我の問題」は、『ヴァン・ゴッホ』や『神の裁きとけりをつけるために』では、身体および国家、社会の問題へと発展していくことになる。その一方で、「名」や「闘い」といったテーマはこれ以降のアルトーのエクリチュールに多大な影響を与えており、以後彼のテキストは固有名やグロソラリーなど、有意味な言語とは異なる〈語のブロッ

ク〉によって浸食され始めるとともに、徐々に戦闘的な激しさを増していくのである。

アイルランド旅行より帰国してから、このテキストが執筆されたと推定されるロデーズの最初の二年間までは、アルトーが不安定な精神状態から抜け出して本格的な創作活動を再開するまでの単なる過渡的な回復期にすぎないと考えられがちである。この時期に書かれた書簡以外のテキストが数少ない上にいずれも小品で、しかも説明を省いた抽象的、観念的な言葉によって謎めいた——時に錯乱も入り交じった——神学的、神秘主義的議論提示しているために理解が困難であるということがその主な理由であろう。それでもやはり、本稿での検証が示しているように、アルトーの思索とエクリチュールにとって重要ないくつかの転回点がこの時期の創作活動において、いわば水面下で準備されていたことは間違いないのであり、この〈転換期〉のテキストをさらに詳細に分析していく必要があると思われる。

註

- 1) この期間の書簡はAntonin Artaud, *Lettres 1937-1943*, Gallimard, 2015に収められている。なおフェルディエール医師は、ロデーズに到着した当初「アルトーの手は書くことを学び直さなければならなかった」のであり、友人たちからの手紙に対しては「はじめはどんなに短くても、決まり文句に満ちていたとしても良いから、強制的に返事を書かせなければならなかった」と、これと矛盾する証言をしている。Gaston Ferdière, « J'ai soigné Antonin Artaud », *La Tour du feu*, n° 63-64, décembre 1959, p.34-35.
- 2) 《Antigone chez les Français》のテキストにはポール・テヴナン編集の『アントナン・アルトー全集』第九巻(*Œuvres complètes, tome IX*, Gallimard, 1979)を使用した。なお、本稿での引用はすべてテキストより直接訳出したが、その際邦訳（「フランス人におけるアンティゴネ」、岡本健訳、『アルトー後期集成Ⅰ』、河出書房新社、2007年、pp.194-198）を参照させていただいた。その他のテキストを含め、『全集』（新版があるものは新版を使用）からの引用は、ローマ数字によって巻数、アラビア数字によって頁数、補巻がある場合には*によって補巻数を示す。引用文中のイタリック体で示した強調は全てアルトー自身によるものである。
- 3) カミュー・デュムリエは2006年に行った「アルトーと精神分析」と題する講演において、ラカンのアンティゴネー読解における「二つの死の間」という概念を導きの糸とし、

精神分析的な観点からこのテキストを概説している。Camille Dumoulié, « Antonin Artaud et la psychanalyse : pulsion de mort et « tropulsion » de vie », in *Revue Silène*, 2007.

- 4) Antonin Artaud, *Nouveaux écrits de Rodez*, Présentation et notes de Pierre Chalex, Gallimard, 1977, pp. 19-20.
- 5) *Ibid.*, p.100.
- 6) この条件に当てはまるテキストは「フランス人たちにおけるアンティゴネー」だけではない。1944年に印刷されたとの記載のある小冊子（出版元は不明で実際には1953年頃に出版されたい）『詩への反抗』*Révolte contre la poésie*も同様の主題をより「詩的」な形式で扱っている。
- 7) 『アントナン・アルトー著作集』の巻末に掲載されているエヴリーヌ・グロスマンが作成した詳細な年譜「アントナン・アルトー 生と作品」では『詩への反抗』および「フランス人たちにおけるアンティゴネー」は1944年の7月から12月の間に書かれたとされている。Antonin Artaud, *Œuvres*, Gallimard, coll. « Quarto », 2004, p. 1759.
- 8) それまでのアルトーは政治的にはむしろ逆の立場を取っており、ヒトラーやヴィシー政権に、自分を精神病院から解放する救済者の役割を期待していた。ドイツ軍がポーランドに侵攻した1939年9月には、「親愛なる」ヒトラーに宛てて「パリの人々にはガスが必要なのだ」(*Lettres 1937-1943, op.cit.*, p.362)と書き、43年12月には『存在の新しい啓示』を献呈している。また、同年9月および10月には、ヴィシー政権の成立に主導的な役割を果たしたビュール・ラヴァルにも「古い友情を呼び起こすため」(*Nouveaux écrits de Rodez, op.cit.*, pp.125-132)に手紙を書き、やはり『存在の新しい啓示』を献呈している。なお、アルトーと戦争との関係については、Florence de Méredieu, *Antonin Artaud dans la guerre*, Blusson, 2013を参照されたい。
- 9) アルトーのテキストにおける固有名については、拙論「アントナン・アルトーにおける固有名の問題」(「フランス文学語学研究」第14号、早稲田大学大学院同誌刊行会、1995)の他、Chantal Allier, « Avatars du nom propre dans la trajectoire d'Antonin Artaud », in *Essaim*, n°16, 2006, pp.7-53を参照されたい。
- 10) アルトーはアルナプロスを名のついていた時、自分が1904年（実際は1896年）にスミュルナ（1923年よりトルコ領イズミル）に生まれたギリシア人であると言っていた。スミュルナは彼の母親ユーフラジエの故郷である。
- 11) Antonin Artaud, *Œuvres, op.cit.*, p.939.
- 12) コクトーの作品自体もソボクレースの悲劇を脚色して上演時間30分ほどに凝縮した短いものであった。1923年に個人誌『ビルボケ』に掲載した「ある論争について　コクトーとアルフレッド・ボワザ」において、『アンティゴネー』でコクトーは「それらが喚起するリアルなドラマのなかで神話的源泉に遡った」(I*, 248)とこの戯曲を評価している。イタリック体で強調された「リアルな [réel]」という形容詞にはテキスト冒頭部の「実在する(＝リアルな)アンティゴネー」という表現との呼応があり興味深い。
- 13) Antonin Artaud, *Lettres 1937-1943, op.cit.*, p.383.
- 14) 実際にはアルトーに兄はなく、双子の弟（ひとり死産、もうひとは生後三日で死去）と末弟フェルナンがいた。
- 15) 「神」はフランス語では《Dieu》と大文字で書き始められるが、信仰を失い始めた頃よりアルトーは《dieu》と小文字で書くようになる。
- 16) Antonin Artaud, *Nouveaux écrits de Rodez, op.cit.*, p. 100. なお、この手紙の草稿とみられるテキストでは、この同じ問題が「さまざまなものが催眠状態にある無意識と闘っている自我の問題」(XI, 49)と表現されている。

- 17) 〈死〉を経由することの必要性は、また同時に〈再生〉もしくは〈転生〉、すなわち〈死後の生〉の必要性でもあり、1937年以降アルトーはしばしば自らの「死」と「転生」を語っている。例えば1944年4月25日のアドリエンス・モニエ宛書簡では「私はもはやアントナン・アルトーではありません。[...] 私の身体は同一ですが、私の意識は別人のものです。[...] 転生 [les vies successives] は実在しているのです」(X, 234-235)と書かれている。
- 18) キリスト教を完全に否定した後、アルトーは「カトリシズムの根本は、淫猥な支持者全てのミサの最中に、自我という神 [dieu le moi] を味わうことにある」(IX, 176)として、自我と神との密かな連携を告発している。またイエス・キリストについては、二千年前自分が、イエス・キリストとしてではなく、アントナン・アルトーという完全な無神論者としてゴルゴタで十字架にかけられたのを覚えていると繰り返し主張し、イエスの死と復活の場面を脱神格化した上で、自らのそれとして書き換えてしまう。おのれの〈死〉と〈再生〉の神話という意味では、このギリシア神話に「名」を借りた自己自身の埋葬の物語は、後の一連の「イエス・キリストの真の物語」の原型になっていると言うこともできよう。
- 19) 当時のアルトーとの直接的な関係は認められないが、1941年にはレオン・シャンスレルが、1944年にはジャン・アヌイがいずれも『アンチゴース』というタイトルでソポクレスの悲劇を翻案・脚色して上演している。両者とも占領下の政治的情勢を作品に投影し、アンティゴネーにナチス・ドイツと戦うレジスタンスの正義を体現させている、あるいはそのように観客に受け止められている。Cf. *Dictionnaire des mythes littéraire*, sous la direction de Pierre Brunel, nouvelle édition augmentée, Edition du Rocher, 1994, pp.92-93.
- 20) Antonin Artaud, *Lettres à Génica Athanasiou*, Gallimard, 1969, p.89.
- 21) アルトーにおけるペストについては拙論「アントナン・アルトーにおけるペストの問題」(『防衛大学校紀要 (人文科学分冊)』、第102輯、2011年)を参照されたい。
- 22) Antonin Artaud, *Nouveaux écrits de Rodez*, op.cit., p. 95.
- 23) 「呪い」や「魔術」についてはすでに1938年に書かれたいくつかの書簡でも言及されており、元々は一部の「〈秘儀を授かった者たち〉[Initiés]」の仕業であるとされていた。アルトーは自分も「〈秘儀を授かった者〉」であり、魔術を使うことができるとも書いている (*Lettres 1937-1943*, op.cit., p.71 et 95)。